

顔画像を用いた自己の主観年齢の推定 —米国人と日本人の比較—

Estimating One's Own Subjective Age Using Facial Images:
Comparison between Americans and Japanese

東泰宏¹⁾、宮本直幸¹⁾、西本真由香¹⁾、藤澤隆史^{1)†}、長田典子¹⁾、小坂明生²⁾

Yasuhiro AZUMA, Naoyuki MIYAMOTO, Mayuka NISHIMOTO,
Takashi X. FUJISAWA, Noriko NAGATA, Akio KOSAKA

E-mail : yasuhiroazuma@kwansei.ac.jp

和文要旨

自己がイメージする自分の年齢を主観年齢と定義し研究を行ってきた。日本人における顔画像を用いた主観年齢は総じて若年視の傾向がある。本研究では、自己若年視の要因として考えられる社会・文化的な要因を検討するために、米国人に対して米国人画像を用いた評定課題を実施した。さらに、日本人に対して米国人画像を用いた課題と、米国人に対して日本人画像を用いた課題も行い、評定課題における顔画像の国籍の要因についても検討を行った。その結果、評定者および顔画像の国籍・文化が、日本および米国の違いに関わらず、主観年齢は総じて負にシフトし、米国人においても自己若年視の傾向があることが確認された。さらに、日本人の結果と比較検討を行うと、米国人男性は日本人男性に比べて自己若年視の傾向が弱いなどの結果が見られ、国籍や文化による影響があることも示された。また国籍が異なる顔画像を評定した場合には、分散は総じて大きくなるが評定平均値間には差がみられない傾向が確認された。本研究の結果、自己若年視は、日本および米国社会・文化に依らず普遍的に起こる現象であるが、その傾向のパターンは、顔画像の要因ではなく、評定者側の社会・文化的な要因によって異なる傾向が明らかとなった。

キーワード：顔画像、主観年齢、実年齢、非線形回帰分析

Keywords : Facial images, Subjective age, Real age, Non-linear Regression Analysis

1. はじめに

人は対面的なコミュニケーションにおいて、顔や声などの情報をもとに、相手の性別や年齢など様々な属性を推定する。中でも年齢は、相手との関係性を決定し、関係性にふさわしい態度や言葉で接するための、非常に重要な情報の1つとなる。ところがわれわれはしばしば、相手の年齢を実年齢より高く推定し、あとになって「もっと年上だと思ったのに…」と意外に感じることがある。

筆者らはこの「他人の顔は年上に見える」傾向が、相手の年齢推定を誤ったのではなく、自己の年齢を実年齢よりも若く知覚しているために引き起こされた現象であると仮定し、研究を行ってき

た[1]-[4]。具体的には、まず被験者に実際の対面的なコミュニケーション状況と同様に、呈示された他者顔が自分より年上か年下かの相対的な年齢判断課題を行ってもらい、得られた評定値の分布データから、「主観年齢」として定義される定量的な値の算出を行った。その結果、1) 日本人の主観年齢は総じて自己若年視の傾向があること、2) 加齢に伴い実年齢に近づくこと、3) 女性より男性の主観年齢の方が低くなること、の3点が明らかとなった。

さらに、自己若年視傾向の要因として、自己の顔イメージの記憶の要因と、地位や自信などの社会心理的な要因の2つがあることが示された。

¹⁾ 関西学院大学大学院 理工学研究科、Graduate School of Science and Technology, Kwansei Gakuin University

²⁾ パデュー大学電気コンピュータ学科、School of Electrical and Computer Engineering, Purdue University

[†] 現在、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、Graduate School of Biomedical Science, Nagasaki University